

あを

7

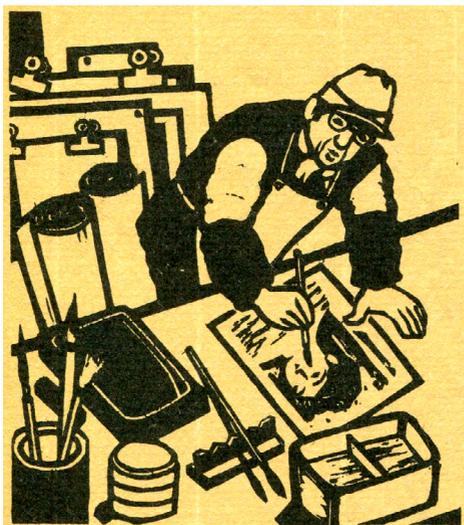
2011



神田川源流



恩田秋夫の
一茶俳句切手



自刻像

きりぎりしやんとして咲く桔梗かな
 待もせぬ月のさしけり冷し瓜
 酒なども売待る也瓜の番
 人来たら蛙になれよ冷し瓜
 我庵や小川をかりて冷し瓜
 盗人の見るともしらで涼し瓜
 初瓜や仏に見せて直下る
 ごろり寝の枕にしたる真瓜哉
 頬べたにあてなどしたる真瓜哉
 みたらしや冷し捨たる真桑瓜

一茶

あそ

七 月



初 蝶

初 蝶 に 指 紋 を つ け し 少 年 期
枕 と は 膝 の 高 さ よ 春 の 晝
貝 櫓 母 の 日 の 母 手 を 振 れ り
巫 の と き に は や 足 若 葉 風
柿 若 葉 膝 を 崩 し て 猫 坐 る

本 町 三 佐 藤 喜 孝

散 歩

嫋 や か に 長 実 雛 罌 粟 群 生 す
緊 急 用 と 立 札 の 井 戸 夕 薄 暑
櫛 若 葉 の 長 き ト ン ネ ル 目 映 か り
蟻 が 蟻 引 摺 っ て 行 く 昼 下 り
凡 凡 と 暮 す の も 良 し 棕 櫚 の 花

清 瀬 赤 座 典 子

⊕

紫蘭咲く小さき庭の華やげる
さくらんぼ一粒程の幸あれば
五月病む六人部屋の人模様
体内の気泡あわだつ五月闇
梅雨の雲逃げるが勝ちの早さかな

聖蹟桜ヶ丘 安部 里子

ロイヤルウエディング

川崎・小田栄 木村茂登子

黄薔薇のやう女王陛下はご健在
葉表をみな陽に向けて柿若葉
あぢさゐや明日の色をたのしみに
掌のかげに生毛の浮く新茶
夏祭自粛の廣き宮居かな

薄 暑

京 橋 篠田 純子

一枚のずれの気になる薄暑かな
抽象画混沌として薄暑かな
茂る枝男に強き嫉妬心
妄想が思想となる日なめくぢら
マロニエの花オーデコロンとすれちがふ

創業四十年

宝仙寺前 芝宮須磨子

創業の吾子の還暦五月晴
四十年苦と共にきて五月晴
紅つつじ世にかかはらず咲き出し
若葉風ビニール傘が街を行く
タンポポの冠毛群れて土手光り

⊕

足をもてあぎとかくこと子猫せる
片栗の花のこれより坂がかかる
ざうざうと梅雨の干潟の広きこと
湯やを出てかくも全円梅雨の月
梅雨の夜灯せば箆笥環が照り

劔地東出つるぎのちひだして

定梶じよう

⊕

古茶少し残したままで新茶かな
金蘭や白馬変らぬ陣馬山
仙人ヶ岳つづくにつづく二輪草
夏帽子今日一日を日本橋
浅き夏児玉清氏逝き給ふ

所

沢

須賀敏子

雪解風

はじめから浮み疲れの海月かな
雉鳩の古巢かぐろし梅雨に入る
水すまし脚のぶつかり合ふ音す
雪解風川面に湯気の立つところ
内海も細螺あそびの日も遠き

浦

和

竹内弘子

牡丹

ヒレカツに辛子たつぷり荷風の忌
露の葉に包みてくれしわらびかな
牡丹に立ち止りゐて遅参せり
万緑やわれにも未来あるごとし
松の花庭師に一人女弟子

田

端

田中藤穂

⊕

一瞬と永遠潜る花吹雪
余震頻頻離婚届にサインせる
だしぬけに歯の揺れはじめ五月かな
体中ことに頭髪蚤の夢
明六つの鐘六つ数へ梅雨に入る

三光坂東亜未

8

サングラス

夏に入る猖獗の後はかどらず
気鬱さの未だ残りぬて夏立てり
有余る紫外線の日サングラス
サングラス友すれ違ひ行き過ぎる
サングラス自分がすこし変るよな

富田長崎桂子

⊕

原発を憂ひし春のキャベツかな
硝子戸に張りつく守宮地震知るや
初鯉震災の海よみがへる
畦を行く人影水に田植どき
進学のかなひし少女クラリネット

大宮早崎泰江

四谷怪談

少年に四谷怪談しろき夏
父の日を来て埼玉の蚊にさされ
繰りごとは病ひのひとつ半夏生
さらばへて無口のほかは三尺寝
扇子に一句師の面影をひらくべく

河田町堀内一郎

9

花通草

落合森理和

休業日てくてく登り花通草
夏初め起重機残るスカイツリ
緑蔭に言問団子スカイツリ
ドミンゴの歌ふ「ふるさと」緑雨かな
蟻屍 蟻引き渡る蟻の橋

⊕

大宮山莊慶子

幼子の髪に流るる若葉風
若草にころげ弾める小犬かな
ホームレスの小屋に小さき鯉幟
藤揺れてひときは目立つ角の家
初夏の夜友待つ香のくゆる

⊕

鍋屋横丁 吉弘恭子

言問ふて春の草ほどまぶしかり
両手あげやの追ひつくしゃぼんだま
初蝶や赤信号を渡りきる
水輪から沈む睡蓮浮くすいれん
初夏眩し他国籍語の真ん中に



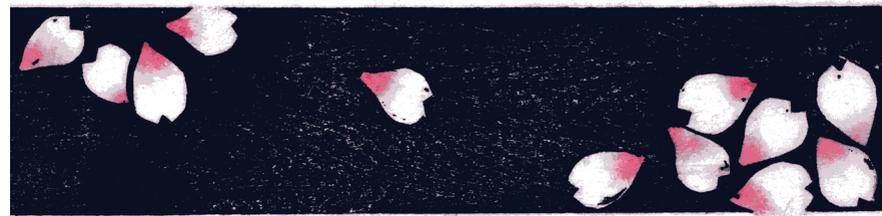
前月作品

終バスか春月ついてゆきにけり 定梶じょう
 徒ならぬ日の重なりて桜咲く 須賀敏子
 葉桜や鉄剤をのむ水の味 竹内弘子
 ゆらゆらと黄蝶高みに余震かな 田中藤穂
 ふるさとの山中櫻はまだ蒼 東亜未
 独り居の集ひて笑顔木の芽和 長崎桂子
 春耕の人影遠くなりゆきぬ 早崎泰江
 冷しさうめん啜る十年の長さかな 堀内一郎
 葉ざくらやぼつりとありし朝礼台 森理和

喜孝抄

一人一句

龜鳴けりストロンチュウム降りやまず 佐藤喜孝
 おぼしまに凭たるる肩の糸桜 吉弘恭子
 雨多き島万緑の中に在り 赤座典子
 子の無くて空家となりし白木蓮 安部里子
 原子炉や田螺はここに住むと云ひ 遠藤実
 音もなく海ふくれ来る春北風 鎌倉喜久恵
 気病して今年の花にあひそびれ 木村茂登子
 まばたきす春のうれひの盲導犬 篠田純子
 目礼の距離にのどかさありにけり 芝尚子
 輪になって家族の絆余寒かな 芝宮須磨子



原発が鬼の口開け貝櫓

佐藤 喜孝

今度の震災で、「想定外」の言葉がよく遣われています。震度にしろ津波の高さにしろ、想定の外であったのは確かでしょう。そして想定は、経験則と経済則の闘ぎあいのもとで決められたものでしょうし、いつてみれば想定とは決めてかかることです。都合のいい数値に決めてかかることも可能です。まあ、傍観者の言はよくないので止めますが、想定外か想定内かは、結果からみれば余り意味をもたない。

さてそこで俳句です。

一句を読み通して、想定内であれば安心して佳句とする人と風向と見なす人。

概ね、作り巧者読み巧者は想定外の取り合わせを佳しとします。楸邨（
蜘蛛の子の湧くがごとくに親を棄つ）の座五。展宏

宙空の風船を「ややの宙」とした処にも工夫がある。
る。

原子炉や田螺はここに住むと云ひ

遠藤 実

まづ「原子炉」と据えたところが面白い。続けて、それでも此処に住もうと宣言するのが田螺であるのがもつと面白い。上五中七以下をつなぐ説明のことばは一切ありませんが、これほど読み手を納得させる句は近年稀れ、と言っても褒めすぎとは思いません。

三合の米研ぐ日々や穀雨かな

鎌倉喜久恵

三合の量に意味があるのでしょうか。
昔流に云えば、一合の米で御飯茶碗二杯ほど。想
36+++++++++か、とすれば作者・喜久恵さん
ご自身の一日のかて、あるいはご夫婦での糧？いず
れにしろ一日分の米を研ぐ毎日のうちにも晩春がめ
ぐつてくる。

「米」と「穀雨」の語がひびきあって、読んで安心（あ

の（赤い根のところ南無妙菩提草）の上句と下。そして掲句、喜孝さんの「貝櫓」。

炉心溶融や水素爆発で原子炉がまさに口を開けてしまつた時、その漏れ出る放射線を、誰が蜃気楼になぞらえたことがあるでしょうか。全く思いかけぬ措辞なのです。想定外なのです。

蛤は蜃気楼を吐き、原子炉は放射線を吐き出す。蜃気楼は数分で消滅する筈ですが、原子炉は。

風船が象にかはりしややの宙

吉弘 恭子

人以外の生きものが夢をみるものか否か知りませんが、人間は赤ん坊のうちからみるといいます。夜泣きなどはその証し。そして夢は心象の連続だそうですから、うつつのみどり児のみる現象は夢のつづきなのかもしれません。宙の風船を見ているうちに、それが象にみえてきた。この連想は幼児の特権。それを上手に表現した。

んじん）の一句。

めまとひや緊急地震速報音

篠田 純子

秋元不死男に（子規知らぬココロ飲む鳴雪忌）がある。その自解で不死男は「橋本夢道に（蜜豆をギリシヤの神は知らざりき）がある。勤め先の銀座・月ヶ瀬のために作ったもので、暫く広告に使われた。剽軽な味が面白い。それを思い出してココロを飲みながらこの句を作った。」とあります。夢道と生年死没を近くする不死男は勿論、正岡子規も蜜豆を知っていた可能性があります。緊急地震速報音を絶対知らなかった。そんな新しいことばをすばやく言いとめて配するに「めまとひ」をもつてきて一句にしたてあげた。うまいと思う。

牛生まる春の朝日のかがやけり

須賀 敏子

朝日のかがやかしさは四季にかかわらない。けれども、玄冬のととの春の朝日は、とりわけ輝かしい。

初心の頃 と 自選十句

そんな時子牛が生まれたのです。もしかして、その時湯気でくもったかもしれない。そして立とうとする子牛。

春の朝日はそんな情景をやさしく見守るのです。

葉桜やぼつりとありし朝礼台

森 理和

朝礼台というのでしょうか。はるか正面に国旗掲揚塔なぞがあつて、グラウンド周辺の、今は葉桜となつた木に少し離れて、中心部に向いて置かれた台。英語では多分ぶらっとフォームと言つたと思うのですが、それが「ぼつりと」ですから、グラウンドには誰もいないのです。周辺の戦ぐ葉桜。もしかしたら、ピッチャーズマウンドがあるかもしれません。そして副詞「ぼつりと」が、むしろ朝礼時の生徒をイメージさせるのです。

蓼科山脇明けのごと雪残る
秋高し仁王立ちにぞ満一歳

もしや父に押されて念仏踊の輪

喰積やをの子の好きは卵焼

眠る山抱へる犬にまだ温み

ゴリラの背逝きし兄の背冬深し

前まはり出来た子供に風薫る

秋うらら靴只今といふかたち

滴りやスイングしてゐる杉の山

三味線革膝を揃へし昼餉かな

東亜未

吟行案内

矢切の渡し

日時 七月三十日(土) 十一時

集合場所 北総電鉄「矢切」駅

予定コース 矢切駅↓野菊の墓文学碑

↓矢切の渡し↓柴又帝釈天↓京成「柴又」

駅

参加希望者は七月十五日までご連絡く

ださい。

尾久の原公園

日時 八月十四日(日) 十一時

集合場所 都電川線「東尾久三丁目」駅

工場跡地に出来た下町の公園、「雨水

を水源とするトンボ池などがある。

参加希望者は八月十日までにご連絡下

さい。

連絡先

佐藤喜孝 090-9828-4244

「七座」句会が神社で始められた頃、尚子様に勧められ伺いました。テーブルの上には料理が並び、今は亡き糸つさんのベレー帽が印象的でした。句会には自分の句を作っていかなばならないと知り、大変だ!!と思いました。

この度十周年の会に参加させていただき限定一冊という自分の句集を頂戴して大感激です。自分の句がまるで名句のように並び思い出がとび出てきます。皆様の会話、お手料理、いまだに初心のまま、句会が楽しみになっております。

水に近き楼台や月の舟屋形

康庸

『毛吹草』に載せる康庸という俳人の作品である。この句は「近水楼台先得月、向陽花木易逢春」という詩句を下敷きにして詠まれたのであろう。

問題の漢詩は北宋の蘇麟という人の作品で、この七言一句しか宋の兪文豹の『清夜録』に収められず、全詩は残っていない。したがって詩題も不明である。

宋の祝穆撰『事文類聚・前集・薦拳』は、次のような故事を述べた。

宋の范仲淹が杭州の長官をしていたころ、蘇麟という官僚がいた。長官の町の武官たちは范仲淹の推薦によつて昇進することが多かったが、蘇麟だけは地方まわりをしていたので、それに恵まれなかった。ある時、蘇麟は范仲淹に「水に近き楼台先ず月を得、陽に向かう花木春を為し易し」という詩を献上したところ、范は蘇を推薦した。

七言二句の詩意は、水辺にあるたかどのに月光は先ずさすし、陽の当たるところに生える花木は茂りやすい。

今日は「近水楼台」という成語になり、ある人と近い関係にある者が真つ先に利を得るといふ意で使われる。「春に逢ひ易し」と「春を為し易し」と、「逢」と「為」の一字の違いがあるのみ。この七言二句は日本にも伝来し、『断腸集拔書』と謡曲『芭蕉』（金春禅竹）に見える。たぶん康庸は謡曲などを通じて、この七言二句を知ったのであろう。すると、「水に近き楼台や月の舟屋形」という句が詠まれたわけである。

水に近い楼台よりは、舟屋形のほうはさらに早く月光を独り占めしているよ。康庸の句は江戸前期の俳諧の言語遊戯の特徴を色濃く表わしたものである。

毛吹集より

かつるいはみな橘の朝臣かな	康庸	晝はかほりよるは蚊おらぬ風も哉	重貞
暑さにもま日のおれかし土用中	康庸	生絹 <small>すくし</small> そといふへき物や蟬衣	宗房
もみくさになるかしほるゝ藤袴	康庸	鶯のあび水なれやむめの雨	重直
水は火に火は水になる螢哉	由生	短夜を引のはしたる朝寝哉	忠也
たくれになれは螢のひの出哉	光重	月末の月はすぼまる扇哉	正直
螢火をとまず油そ池の水	政公	半月はかどのたをれぬ扇哉	重供
挑燈かつりかね草にとふ螢	作者不知	くらけにもたとへん月の扇哉	盛政
蚊の聲はうたかふ夏の始哉	正直	瓜は又人をひやせる清水哉	利清
		似た物そ二ツにわつた瓜と瓜	弘永

あをかき集

田中藤穂選



初夏や源兵衛堀の風さやと
新緑の香りとりこむ掌

吉弘 恭子

風さとは下枝の間合ひうごき初む

さむいさむいと夕焼空を春鴉

やはやはとむらさきだいこんもち帰る

高高し鴟尾に揺れたるさくらかな

軽業とおぼしき橋を渡る初夏

鶴頸に芍薬二輪寄添ひて

赤座 典子

ほんのりと非日常の香茗荷飯

胡瓜一本迷はずに買ふ日々となり

暮泥む七時の夕餉花石榴

軽やかな日少くて梅雨入とや

新聞のくたりと届く梅雨湿り

梅雨晴の門扉に傘の花盛り

よろこびの命ふりまき初燕

早崎 泰江

花婿のオウム返しやライラック

篠田 純子

少女期のままのくるぶし夏立てり

春の虹潦から放射能

夏落葉祝福のごとあびてをり

男にも血の道のあり青蜥蜴

画材屋の入口狭し紅牡丹

山羊親子げんげ畑を我が物に

何となく人生思ふ霞草

芍薬やしづかなと日過ごすなり

まだ蒼かたきあぢさゐ心閉づ

田を植えて大き足跡残しをり

泥田なるはこべら白き畦に佇つ

定梶じよう

宝籤買うてしばらく暖かし

風光る弘法麦の穂のまはり

善玉も悪玉も飛ばしやぼん玉

つばくらの巢作り塗師屋軒を貸す

胴の間に臈をよこたふる春惜しみ

潜り来て干す鶴の羽根が重たさう

日本国フクシマは何処梅雨に入る

須賀 敏子

時戻す電力不足の夏に入る

ダービーやずぶ濡れの騎手拳あげ

山小屋の跡地にも白き二輪草

沢沿ひの径に明るく山吹草

薄暑光フリマの客の値切りたる

早々と梅雨入りの日のマーマレード

老鶯や墓誌に彫られし名をなぞる

森 理和

初夏や万国旗揺る起立礼

鬼の形相もちバトン継ぐ青葡萄

聖五月天辺一人組体操

緑さす滴りつかみ童笑む

徒競走も一度したい汗噴く子

銀鼠の紹をガラス越し綿豆腐

うす赤み遅い芽吹きとなりにけり

長崎 桂子

落下傘たんぽぽの絮の行先に

葉桜の影濃き方へ人の列

映画の一齣若葉の並木通りかな

CO₂を考へ込むや五月闇

川風に鈴と読経の薄暑かな

バラのジャム手造りスコーンタイム

木村茂登子

花薔薇神の妬みか棘を抱き

白飯に梅干番茶昭和の日

花水木のほど良き陰をひろひゆく

クールビズおしゃれな人の清潔感

君が代や日本ダービー雨の馬場

空港の日傘の下でさやうなら

佐藤 喜孝

貨物船見上げる小さき白日傘

黒日傘海を一度も見ずに去ぬ

梅雨青葉はふりの傘の重なりぬ

少女期のままのくるぶし夏立てり

純子

夏が来て、素足になった、そのくるぶしを作者は見ている。その人を少女の時から知っている。今はもう少女ではないけれど、くるぶしは、あの頃のままだと思った。愛情の籠もった眩しいような句だ。ちなみに少女期とは何歳くらいだろうと広辞苑を見たら、大宝令で十七歳以上二十歳以下の女子の称と出ている。大宝令で定められているのも何だか変な気もするが、昔と今ではすべての事が大分変化しているようである。

男にも血の道のあり青蜥蜴

純子

血の道の病は女性特有のもので、男にはない筈だが、あえて言えば更年期か。年齢的な身体の変調を

佳句後言

戯けてこう言っているのでしょう。しかし、今まで

知らなかった、頭痛・のぼせ・めまい等々不安でも

あり、薄気味悪いことでしょう。それを青蜥蜴の一

語で表現しているのが見事です。くれぐれもご自愛

を祈ります。

画材屋の入口狭し紅牡丹

純子

谷中の墓地から上野公園へ行く細い道に画材やさんがあって、子供の時からそこを通る時は、いつも気になって見たものだ。不忍池から少し上野広小路へ寄ったところにも画材屋があつて、絵筆とか、ガラス瓶に入った岩絵具が棚に並んでいた。客は大方絵をかく人で常連のようだ。作者はその画材屋と、狭い入口に着目した。入口近くに置かれた鉢植えの紅牡丹も、油絵の具の濃厚な色を連想させて適切。

非の打ち所がない句と思います。

よい句材を見つけたことに感服です。

初夏や源兵衛堀の風邪さやと

恭子

句の調子の良さと、気持のよい風が吹き渡るよう。

近頃の心重い世相の中、救われる一句です。

さむいさむいと夕焼空を春鴉

恭子

春になって急に暑い日があつたり、また寒の戻りのような寒い日があつたりする。鴉や雀も、人と同じようにそれは感じるに違いない。此の作者は、ある春の寒い日に、夕焼けの空を飛んでいる鴉が、身をちぢめてさむいさむいと言っているように感じたのだ。鴉と一体化している作者が面白くも優しい。

芍薬やしずかな一と日過ごすなり

泰江

豪華絢爛な牡丹と比べて芍薬はちよつと控え目で、優しい気品がある。私も大好きな花。

その芍薬を部屋に活けて、静かな一日を過ごしている。と言うのが、少し淋しさもあるが、豊かに満ち足りた気持で今を肯定している。

語尾の「なり」に決意のようなものも見えて、悟りの境地に達したような心ひかれる句でした。



走馬燈路地に書き出す○□

もの書きになりそこねたる蝸牛

青嵐点滴中の読書かな

神奈川新聞社

毎月25日発売 定価900円(税込) 月刊**俳句界** 2011年9月号

特集 名人達人に見る 作句のテクニク

- 一限目 高濱虚子から学ぶ 岸本尚毅
- 二限目 久保田万太郎から学ぶ 寺島ただし
- 三限目 飯田蛇笏から学ぶ 瀧澤和治
- 四限目 中村草田男から学ぶ 新海あぐり
- 五限目 上田五千石から学ぶ 松尾隆信

◎テクニク他 「取合せ 橋本直」「切れ字」天野小石
「反語」谷口摩耶 「地名」木山杏里

特別 インタビュー **金子兜太** ■第一回 ■
聞き手・対馬康子

特別作品 眞鍋呉夫 村上護 高橋陸郎
カラーグラフィック 俳句界NOW 古賀雪江

東北俳句とは何か その魅力を探る
◎東北学の権威が語る 赤坂憲雄 錦仁
↳東北とは何か? 伊那かつべい
◎東北方言俳句の面白さ 伊那かつべい
◎東北句セレクション 白濱一羊 ◎論考

文字のない「被災地・石巻の今」橋本照高
エッセイ

魅惑の俳人 菖蒲あや
◎佐高信の甘口でコンニチハ!
ゲスト 崔善愛(ヒュニスト)

◎新作三句
松林朝蒼 嶋田麻紀 岸原清行
児玉輝代 佐怒賀正美 鳥居三朗

※一部変更の可能性あります。
株式会社**文学の森** お求めは...〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

あを柳集

兼題 書

佐藤喜孝 選

走馬燈路地に書き出す○□

書の書手によつては○や□を書いた作品が法外な価格で取引されるが、子供の描いたものに近づけやうとするはたらきが伺へる。子供の頃路地に棒などの固い物でいろいろ線を引いて遊んだ。アスファルトで舗装されてからは蠟石や白墨が使はれた。○□がこの句を生かしてゐる。

もの書きになりそこねたる蝸牛

子供のころは誰でも将来への夢がある。幼少の頃はケーキやさんとかウルトラマンとかまさに夢の世界。長ずるほどに夢も現実味を帯びてくる。少年少女のころの夢が中高年になると甘酸っぱくときどき頭を擡げる。「もの書き」となると古色を帯びてくる。同じやうな職業はあるが現代の職業ではない。季語はありがたい。「蝸牛」が含蓄のある俳諧に仕上げてゐる。

青風点滴中の読書かな

点滴中の読書とは恐れぬつた。作者は最近入院なされたやうで作品欄には「五月病む六人部屋の人模様」を発表されてゐる。入院を機に、生じた時間をタップリと好きなことに使はうとする意欲に圧倒される。

題詠「書」（順不同）

走馬燈路地に書き出す○□

森 理和

般若心経書かされし後苔の花

納付書の分厚く重くソーダー水

掛軸に一文字の書紅牡丹

長崎 桂子

白服は腕に掛けをり書道展

夕焼や黙し落書消す男

親し友行書の文にあやめの絵

青春の文庫は書棚ソーダー水

抽斗に夫の書物白緋

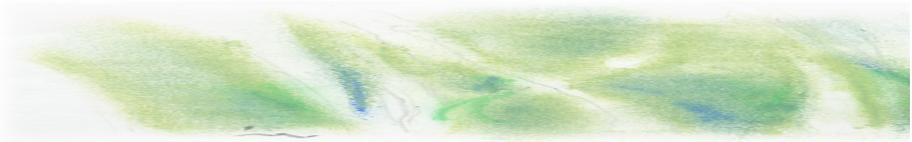
書き置きは三面鏡に探梅行

吉弘 恭子

落書はそつと机に花菖蒲

もういちど書き足す父に年賀状

書き慣れた苗字に戻る青葉なか





書き抜きは一九四一年の冬

ゆさはりや血統書付の犬だとさ

荅かな遺書とも思ふ母の文

絵葉書に一行見舞ふ初便り

教科書がカラフルになり新学期

遺言をいよいよ書く気春の地震

心太不意に言はれて書けない字

丈山の書風おだやか柿若葉

宙に書く復興の二字夏の海

もの書きになりそこねたる蝸牛

夏蝶や追悼の文書きあぐむ

花空木聖書の国の戦つづく

土産なる団扇飛驒路と大書され

春嶽の書に置く白き杜若

青嵐点滴中の読書かな

木村茂登子

田中 藤穂

安部 里子



風薫る読書三昧入院中

朝焼や病室にての新刊書

書き終へて出さないことに若葉の夜

色違ふ谷中生姜のお品書

辞書曰く兎は毛皮と肉だとよ

書初の一の字筑波の山すがた

少年の悪書をひらく花火の夜

篠田 純子

佐藤 喜孝



あをキーワード俳句辞典(きげーきぎ)

機嫌

機嫌良き野鍛冶のリズム青田道	篠田 純子
日脚伸び上機嫌なり今日の母	森 理和
糠床の機嫌はかれぬ炎暑かな	木村茂登子
落葉掻く音も機嫌のわるさうな	芝 尚子
薄氷や目高の機嫌うかがひぬ	早崎 泰江
帰国	
拉致家族五人が帰国田植済む	寺門 武明
弾痕をほほに父は夏帰国	吉弘 恭子
帰国の子待ちてきのふよりおでん	斉藤 裕子
日焼また眩し娘の帰国かな	吉成美代子
着こなす	
何気なく透綾着こなし白日傘	芝 尚子
素裕をきりり着こなす男かな	芝 尚子
兆す	
黄水仙草の中より良き兆し	早崎 泰江
吉兆の糾へるごとく蜆汁	赤座 典子
この国の変はる兆しや星の秋	須賀 敏子

五月の句会

柿若葉膝を崩して猫坐る 喜孝
 躑躅丸く岩は尖りて亀の池 敦子
 葉桜や立ち暗みとも余震とも 弘子
 渋滞情報聞きつ静かに柏餅 典子
 万緑やわれにも未来あるごとし 藤穂
 初蝶や赤信号を渡りきる 恭子
 片方が先に飛び立ち風光る 綾子
 原発を憂ひて春のキヤベツ剥く 泰江
 春燈を連ねて海のモノレール 喜久恵
 風の中の藤房となり背信へ 寒林
 古茶少し残したままで新茶かな 敏子
 花通草てくてく登り休業日 理和

あを吟行会

夏がすみ直立といふ塔なれど 喜孝
 水色に現るる飛行機夏燕 綾子
 軽トラツク行く新緑の業平橋 藤穂
 業平の鴉は居らず夏霞 敦子
 藤棚に少し切られてスカイツリー 恭子

スカイツリー

七座句会

初蝶に指紋をつけし少年期 喜孝
 本当はずしんずしんと蠶 寒林
 瓶の苔なめて金魚の日ぐれかな 綾子
 もの書きになりそこねたる蝸牛 藤穂
 タンポポの冠毛群れて道光り 須磨子
 ドミンゴの「ふんやと」沁むる緑雨かな 理和
 初夏眩し他国籍語の真ん中に 恭子

中野区・小川苑

傳句会 毎月第2火曜
 カフェ傳 森 理和
 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
 岸町公民館 竹内弘子
 (0488-86-3501)

あを吟行会
 詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜
 小川苑 吉弘恭子
 (090-9839-3943)

四季俳句

THE HAIKU SHIKI

2017 9 SEP. 8月20日発売 定価880円(税込)

巻頭句
 名和未知男・久保 武・小川濤美子
 山崎 聰・竹本健司・阿部ひろし
 矢須恵由・塩川雄三・伊達甲女

座談会 「最近の名句集を探る」
 宇多喜代子「記憶」
 鳴戸奈菜「露景色」
 岡田日郎「新雪」
 司会 筑紫磐井・齋藤慎爾
 小川軽舟・上田日差し

■好評連載
 現代俳句史・川名 大 白田垂浪の光
 彩・加藤哲也 俳壇観測・筑紫磐井
 一望百里・鈴木勲之 俳句十二ヶ月・
 松村多美 来し方行く末・小島千架子
 難病の俳人達・由利雪一

「海」吟行記 高橋悦男
 第一句集物語 鈴木鷹夫
 16句 今瀬剛一・小澤 實
 鎌倉佐弓
 花の歳時記 小路紫峽
 井村経郷・古賀雪江

お求めは電話 03 (3358) 5860まで 東京四季出版 〒160-0001 新宿区片町1-1-402

季語刻々

坪内稔典

今昔

「豆の採れる時期ならではの味と風味を出すためには、出しをしつつこくしないこと、豆の緑が鮮やかに仕上がるように塩味にすることがこつ」。これは「角川俳句大歳時記(夏)」の「豆飯」の解説。筆者は俳人の宇多喜代子だが、彼女は豆飯が大の好物なのだろう。豆飯の匂いに家族が集まる。今日の句のその光景、いいなあ。

豆飯やいつもだれかがそばにくる

佐藤 喜孝

〈毎日新聞より〉

2011.5.12

あとがき

拙句が新聞に載っていると堀内一郎さんに教へられた。早速図書館へ。翌日の季語刻々は「豆飯や娘夫婦を客として 安住敦」の句が紹介されてみた。豆飯は人と繋がりがあがるやうです。

「毛吹集」の「鶯のあび水なれやむめの雨」の梅の雨は梅の花に降る雨かと思つたら梅雨のことと知つた。現代作家は余り使はない。「間に合ひし夕日に梅の雨上る 稲畑汀子」永田耕衣に「吹毛集」がある。「水を釣つて帰る寒鮎釣一人」 〈喜孝〉

二〇一一年七月号

発行日 七月十四日
発行所 東京都中野区中央2,50,3
電話 090,9828,4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子 表紙・佐藤喜孝

郵便振替 会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
00130,655526(あを発行所)
乱丁・落丁お取替えします。